



SENDAI
UNIVERSITY

50周年記念シンボルマーク（夏）

SPORTS FOR ALL ～ スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に ～

Monthly Report



SENDAI UNIV.

PUBLIC RELATIONS

Vol.133 / 2017 MAY.

（月1回発行）

仙台大学開学50周年記念行事⑤

「第3回プラぞり大会」を開催



学生が押す体験用スケルトンを楽しむ参加者

5月27日（土）、本学第4体育館で「第3回プラぞり大会～仙台大学開学50周年記念大会～」が実施され、小学1年生から小学6年生までの宮城県内の子供たちとその保護者約60名に参加いただきました。プラぞり大会は、冬季オリンピックの正式種目になっている「ボブスレー・リュージュ・スケルトン」のソリ競技の魅力を知ってもらうことを目的とし、今回は仙台大学開学50周年記念事業の冠大会として、ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の学生が主体となり実施されました。本大会は東京オリ・パラ競技大会組織委員会の東京2020応援プログラムに認定されており、「スポーツの力」を活かした地域貢献や発展を目指した大会としても意義深い行事の一つになっています。

当日は、前日からの降雨により、会場を第4体育館に変更しローラースケルトン体験会とプラズマカー大会を代替で行いました。

ローラースケルトンの体験では、地面から数センチの高さで前を見するという日常生活では感じる事の出来ない世界観やスピード・迫力を疑似体験。

プラズマカー大会では、1人乗りの部と親子の部を設け、家族で参加できるような新たな取り組みも始めました。

はじめに、本学の学生から怪我や事故の無い様に準備運動や諸注意を聞いた後に、参加した子供たちはプラズマカーを速く滑るコツや乗り方を教わりながら練習し、大会の最後をレースで締めくくりました。

思うようにプラズマカーをコントロールできず悔しい表情を浮かべていた参加者もいましたが、学生や参加者同士で応援や歓声を上げながら終始楽しんでいました。

（次頁に続く）

〈目次〉

仙台大学開学50周年記念行事⑤ ・「第3回プラぞり大会」を開催	1
仙台大学開学50周年記念行事④ ・ロシア・ニジネゴロド州 サッカーチームと親善試合	2
仙台大学開学50周年記念行事③ ・仙台国際ハーフマラソン大会	3-4
仙台大学開学50周年記念行事② ・女子バスケットボール部 マレーシア代表と親善試合	5
・仲野副学長が WLSA第1回国際 フォーラムで発表 ・みやぎ米キャンペーンを開催	6
「一般社団法人全国体育スポーツ系 大学協議会総会」「全国体育系大学 学長・学部長会総会」などが開催さ れる	7
・仙台89ERSスポンサー感謝の集いに 参加 ・ロービジョンフットサル日本代表監督に 大学院1年の齋藤さんが就任	8
・韓国交通大学一行が来訪 ・平成29年度学術会総会	9
・本学で収録の「奇跡のレッスン」が 全国放送されました	10
・「日本体育協会アスレティックレー ナー」検定試験に運動栄養学科より 初めて村上泰司さんが現役合格	11
・菊地新助手が管理栄養士国家試験 に合格	12
・2020東京五輪に向けて～活躍が期 待される新入生～	13
・学生の活躍	14-17

学生の活躍や、取り組みなどをご存知
でしたら広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機
関にも旬な話題を提供して参ります。

本誌へのご意見・ご質問等がありま
したら広報室までご一報ください。

仙台大学 広報室
直通 0224-65-1802
Email kouhou@sendai-u.ac.jp



岩沼市から参加した小学3年生の女子児童は、「プラぞり大会は今年初めて参加しました。お母さんと競争し、勝つことができ嬉しかったです。大学生のお兄さんお姉さんも優しく説明をしてくれ、応援してくれたりと楽しかったです。来年は太陽の村で優勝出来るように頑張ります。」と感想を述べました。また、昨年の第2回大会も参加した大河原町の小学4年生の男子児童は、「最初は難しかったけれど、練習していくうちにできるようになって楽しかった！」と笑顔で語っていました。

その他に本大会では、ボブスレー・スケルトン競技のことをより知って頂く為の競技紹介のブースも設置しました。ここでは、実際に競技をしている様子の映像や道具、オリンピックのグッズ、ナショナルチームに所属している学生の「JAPAN」と書かれているウェアの展示などを行いました。初めて見る道具やウェアなど子どもたちも興味津々に見てさわり、ブースコーナーを楽しんでいました。

今回のプラぞり大会を通して、大会委員長を務めた本学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部の高橋迪さん（体育学科3年一宮城・富谷高校出身）は「雨の影響で太陽の村でのプラぞりのレースはできませんでしたが、代わりに行ったプラズマカーでのレースで、子供たちが負けて悔しがっていたり、友達を応援していたりと子供たちの何事にも一生懸命な姿を見ることができて良かったです。今後もプラぞり大会のような活動を続けて、ソリ競技の普及、発展とともに地域に貢献していきたいです。」と話しました。

ゼロから始まったプラぞり大会も今年で無事に3回目を終えることが出来ました。年々、色々な体験を積み重ねる事で新たな発見・課題や反省が見つかります。これまでの経験を活かし、第4回目の大会も企画・開催していこうと考えております。本大会は、仙台大学のサポートがあってこそ開催できます。今後は更に地域に密着したイベントを実施し、2018年平昌・2022年北京へと続く冬季オリンピックに向けて日本のソリ競技の中心であり続ける事を目指します。また、私たちの競技力向上はもちろん、地域の方々にも応援していただけるような選手の育成・競技普及を目標に努めてまいります。

【報告：新助手 進藤 亮佑】

仙台大学開学50周年記念行事④

ロシア・ニジェゴロド州サッカーチームと親善試合

5月23日（火）に利府町にある「ひとめぼれスタジアム（宮城スタジアム）」を会場に、本学男子サッカー部と宮城県との国際姉妹県であるロシア・ニジェゴロド州のサッカーチームとの親善試合が開催されました。

今回の親善試合は、2018年のワールドカップがロシアで開催されること、また、2020年にはオリンピックが日本で開催されることなどから、経済交流から始まりました両県の交流事業の一環として、スポーツによる交流を目的に行われたものであり、宮城県から本学に対する交流打診がきっかけで実現したものです。

試合前には開会のセレモニーが行われ、両チームでの記念撮影などが行われました。試合は本学が常にリードを奪う展開で5対1で勝利しましたが、ニジェゴロド州チームも最後まで攻めのサッカーを展開していました。当日は国の総務省からも視察があり、今後、日露首脳会談の折には日露交流の場面ということで、今回の様子を伝えていくとのことのお話しでした。

また、ニジェゴロド州からの一行は親善試合の他にも22日（月）に本学を訪問し学内を見学したほか、明成高校サッカー部との練習試合なども行われました。

来年は、本学サッカー部が訪問し、ニジェゴロド州のワールドカップ会場での親善試合が計画されています。



試合終了後の両チームの選手・関係者

仙台大学開学50周年記念行事③-1

「第27回仙台国際ハーフマラソン大会 国際姉妹都市交流会」に参加

5月14日（日）に江陽グランドホテルにて、「第27回仙台国際ハーフマラソン大会 国際姉妹都市交流会」が開催されました。姉妹都市の参加は、リバサイド市（アメリカ）、レンヌ市（フランス）、ミンスク市（ベラルーシ）、アカプルコ市（メキシコ）、長春市（中国）、ダラス市（アメリカ）、光州広域市（韓国）、台南市（台湾）の8都市の参加がありました。本学は、2020東京オリパラ事前合宿地として、ベラルーシ新体操チームの誘致が決定した直後の平成29年2月22日～24日の期間でミンスクを訪問しており、今後もミンスク市とは活発な交流が期待されています。

今回の仙台国際ハーフマラソン大会日本陸連登録競技者の部（海外男子）では、ミンスク市のジミートリ・フラマトウスキ（Dzmitry Hramatouski）選手が1位（全体順位は36位）を獲得しました。ジミートリ氏は、本学と提携を結ぶベラルーシ国立体育学院の卒業生でもあり、本大会において自己ベストも更新されました。

懇親会は終始和やかな雰囲気です。参加選手団の方や宮城・ベラルーシ協会の方々とも交流を深めることができました。



ベラルーシ・ミンスク市関係者と

【報告：講師 山梨 雅枝】

仙台大学開学50周年記念行事③-2

ベラルーシ政府関係者が仙台大学に来学 ～仙台国際ハーフマラソン招待選手など～



本学を訪問したアンドレイ・パツェエウ氏（後列右から4人目）

5月13日（土）午後、ベラルーシ共和国ミンスク市スポーツ観光部筆頭副部長のアンドレイ・パツェエウ氏が仙台大学を訪問されました。同氏は翌日開催された第27回仙台国際ハーフマラソン大会へ招待された同国選手の引率で来日されました。ベラルーシ共和国の首都ミンスク市と仙台市は国際姉妹・友好都市として協定を締結しており、毎年同大会へ選手を招待されており、今年も例年通りの大会参加となりました。アンドレイ・パツェエウ氏は、大会前日の5月13日（土）午前中に仙台市と面談をし、その足で午後からベラルーシ新体操チームの2020東京オリパラ事前合宿地として選定した白石市と仙台大学を訪問、合宿地の施設等を見学されました。仙台大学では見学時間が極めて短かったことから、LC棟、C棟3階の人工気象室と低酸素環境室、第3体育館のトレーニングセンター及び柔道場、第4体育館のA/Tルーム、新体操練習場のみの見学ツアーとなりましたが、最新の設備が整った本学に大変感心され、設備の導入年やトレーニング機器の製造国等の質問もされておりました。また、柔道場、新体操練習場見学時は、練習中だった本学学生へ声を掛けられ、できるだけ上位の成績を狙えるよう激励下さいました。

【報告：スポーツ健康科学研究実践機構事務室 室長 近江 康宏】

仙台大学開学50周年記念行事③-3

アスレティックトレーナー部

仙台国際ハーフマラソン大会でサポートブースを設置



ブースを利用した同窓生とともに記念撮影

5月14日（日）に、本学アスレティックトレーナー部学生9名とアスレティックトレーナールーム新助手2名が、開学50周年記念行事として仙台国際ハーフマラソン大会にてブース活動を実施しました。今回は陸上競技部部長の名取英二准教授のご紹介により、アスレティックトレーナー部の活動史上初めて、1万人の参加者を超える大型国際大会のサポート活動を実施することができました。当日は朝6時から準備し、7時から14時頃までのブース活動となりました。

今回の活動で一番力を入れたのは、本学50周年を記念した先着50名限定のキネシオテーピング・ストレッチでした。参加学生は事前に練習を重ね、その結果当日のテーピング利用者数30名、ストレッチ利用者数は97名にも上りました。仙台大学関係者や同窓会ランナーの方々にもブースを利用いただき、全体の利用者数は136名になりました。

もう一つの大きな目標は、1万人を超えるランナーに対し、熱中症予防や水分補給についての啓発活動を実施することでした。資料は国際大会ということもあり英語・日本語にて作成し、大会主催者側にも確認を取り、当日は約100個設置されていた仮設トイレとランナー更衣室全てに、熱中症・水分補給・ストレッチなどの資料を掲示させていただきました。今回はあいにくの雨で気温も低く、熱中症の危険度は低かったと思われませんが、ランナーの方々が今回の資料を目にしたことで、今後熱中症などの事故予防に少しでも意識を向けてもらえたらと思います。

本学開学50周年記念行事としてのアピールも何点か行いました。50周年記念のぼりの設置、50名限定テーピング・ストレッチ、各資料への50周年記念マークの使用、活動学生着用ビブスに50周年（50th Anniversary）の文字を使用した事などで

す。一番大きなアピールとなったのは、100個ほどあった仮設トイレに貼り出した資料です。1万人のランナーの殆どがトイレを利用したはずで、仙台大学や50周年の文字を目にする機会が多かったかと思います。

全体の総括として、テーピングやストレッチは好評だったと思います。悪天候のため実施スペースに限りがあり混雑しましたが、参加学生は各利用者の方々の希望に沿える様、丁寧な対応を行っておりました。大学関係者や同窓会の方々にも利用していただき、参加学生も様々な方々と交流が出来て大変良い機会となりました。日本ではアメリカと比べてアスレティックトレーナーの認知がまだまだ遅れていますが、このような大きな大会でサポート活動をすることにより、アスレティックトレーナーの啓蒙にも繋がったと考えられます。今後もアスレティックトレーナー部では学生教育に力を入れ、社会に通用するアスレティックトレーナーの育成や、アスレティックトレーナーの有用性について人々に理解していただけるよう活動を続けていきたいと思っています。最後になりましたが、今回の行事に関しましてご協力いただきました方々に、心より感謝申し上げます。

【報告：新助手 鈴木のだぞみ】



大会参加者にストレッチを施す学生（上）
ブースは終始大勢の人で賑わいました（下）

仙台大学開学50周年記念行事②

女子バスケットボール部 マレーシア代表と親善試合

仙台大学女子バスケットボール部は、平成29年5月13日（土）山形銀行の体育館にて、マレーシアのナショナルチームとの親善試合を行いました。オープニングセレモニーでは、記念品の交換し、仙台大学からは50周年の記念Tシャツとタオルをプレゼントしました。部員全員が身振り手振りを交えながら一生懸命に英語でコミュニケーションを図っていました。

試合は、マレーシア代表、山形銀行、秋田銀行、仙台大学の4チームで行い、マレーシア代表とはハーフゲームを戦うなど、本チームにとって貴重な経験となりました。

身長が高い選手がたくさんいたため攻め込まれる場面もありましたが、徐々に対応できるようになり、午後の10分ゲームは終始リードする展開に持ち込みました。そのため後半は、色々な選手を起用できました。

マレーシア代表は、5月8日から5月18日まで山形銀行の体育館で、色々なチームと試合を重ねるそうです。今回が初めての海外遠征試合とのことで、食事や環境に慣れるのが大変だったようですが、終始声を出していて、とても良い雰囲気です。

当日は、山形県のさくらぼテレビが取材に来ており、夕方のニュースで試合の風景が映し出されていました。マレーシア代表のウォン・スィン・ユィンヘッドコーチは「試合を通じて日本のチームからメンタリティーや激しいプレーを体験して学んでいきたい」とインタビューに答えていました。

【報告：女子バスケットボール部監督 助教 菅野恵子】



マレーシアチームと試合をする本学チーム

仙台大学開学50周年 同窓会記念行事①

仙台国際ハーフマラソン大会に協賛

～多くの同窓生が杜の都に集結～

5月14日（日）に開催された第27回仙台国際ハーフマラソン大会に仙台大学同窓会が開学50周年を記念して協賛しました。

この大会には例年、多くの同窓生が参加しており、同窓生が集う場の一つともなっています。今年は特に開学50周年の記念すべき年であることから、「杜の都を仙台大学グリーンで染めよう」をキャッチフレーズに例年以上盛り上げようと、ホームページやフェイスブックで参加者を募りました。その結果、出場者だけでなく沿道で応援して下さる方々が北は北海道、南は沖縄県から約100名の同窓生に集まっていただきました。

あいにくの天候でしたが、参加者は2km、5km、ハーフとそれぞれのコースを思い思いに力走り、応援隊の皆さんはコース沿道のあちらこちらで「仙台大学同窓会」の横断幕やのぼり旗を掲げ、大会参加者の応援のみならず、仙台大学の開学50周年を広くPRいただきました。

また、大会終了後には市内のホテルを会場に大懇親会も開催され、約50名の同窓生がご参加くださいました。会の中では全国各地から集まったお土産品が当たる「くじ引き大会」が行われるなど終始熱気に包まれていました。

大会や懇親会を通じ、改めて同窓生の熱い「仙台大学愛」を感じた1日となりました。



スタート前の記念写真（上）
大懇親会の記念写真（下）

仲野副学長 WLSA・第1回国際フォーラムで発表

4月11日～14日にWLSA（世界レジャースポーツ協会）が主催する第1回国際フォーラムがマカオで開催され、出席してきました。この協会は昨年アメリカのカリフォルニアで設立され、この度マカオ支部が設立することになったことを記念して国際フォーラムが企画されたとの事でした。

私に関わることになったきっかけは、3月に本学大学院に留学し現在は中国で大学教員として活躍している楊光先生から朴澤理事長・学事顧問を通じ、同協会の副主席の一員として就任しフォーラムにも参加して欲しいという依頼があった事に起因します。直ぐにWLSAをインターネットで検索したもののヒットせず、迷いながらも楊光先生からの依頼なら承諾させていただいた次第でした。個人的に中国語は分かりませんが、諸外国の方々も参加するし行けば何とかなるだろうと思っていたところ、通訳として大学院職員の馬冬梅さんに同行願えたことは大変ありがたかったです。

11日は会長・副会長・理事等が一堂に会し、事前の打ち合わせ会議と歓迎会がありました。参加して初めて分かったことは、副主席はカナダ・フランス・オーストラリア・ロシア・中国などから構成される10名で、日本人は私だったことです。打ち合わせ会議で渡されたプログラムを確認したところ、12日の開会式直後の2名によるメインプレゼンテーションのホストに私の名前が、さらには、翌13日のレジャースポーツと経済・サミットフォーラムの3番目の発表者にも私の名前が記されていました。少々のことでは動揺しない私ですが、これには流石に度肝を抜かれた思いをしました。というのも、事前の情報では、この度のマカオ滞在では私の役割は会議等への出席以外には特に無いということだったからです。とはいえ、既に製本されたプログラムに列記として記されている以上、お断りすることはできないので、持って行ったパソコンで急ぎ、過去のファイルや発表データ、さらにはインターネットをフル稼働して『「The development of leisure sports in Japan」 by Takashi Nakano』を発表当日の朝までかかって英語のスライドを完成させ発表させていただきました。大変でしたが、結果的にはフロアーにも興味を持っていただけたようでしたし、良い経験になりました。

最後に、「マカオは第2のモンテカルロやラスベガスを目指している」という報告がありましたが、確かにホテルというホテルにはカジノがありましたし、観光資源は豊かで、夜も治安は悪くありませんでした。世界5位のGDPを誇るマカオは、カジノという大きな収入源のみではないという印象を打ち出す一つの手段として、国家を挙げてレジャースポーツに力を入れる国策に出た実に興味深い現実を垣間見れました。

【報告：副学長・体育学科長 教授 仲野 隆士】



フォーラムへの参加者と共に（右から4人目が仲野副学長）

「なちゅら」で「JAグループ宮城・みやぎ米キャンペーン」が今年も開催

5月25日～26日のランチタイムの10：30～15：00、本学学生食堂「なちゅら」において「JAグループ宮城 みやぎ米キャンペーン」が開催されました。

このキャンペーンは若者たちのコメ離れに歯止めをかけようと、JAグループ宮城が企画し開催しているもので、本学での開催は昨年7月に続き2回目です。

この2日間、学生食堂「なちゅら」には、米どころ宮城が誇るブランド米「ひとめぼれ（環境保全米）」120kg、約600食（2日間）が無償提供され、つやのある美味しい炊き立てご飯を美味しく笑顔で頬張る学生たちの姿が多くみられました。

食堂の店長によりますと、いつもより定食を頼む学生が多く、キャンペーンの効果があつたようだと話していました。

また、アンケートに答えた学生には真空パックの「無菌パックごはん」が景品として配られ、一人暮らしの学生にとっては保存食にもなり重宝すると好評だったようです。開催初日には報道関係4社（東北放送、ミヤギテレビ、河北新報社、日本農業新聞社）が来訪しインタビューを受けた学生たちも率直な感想を述べていました。



美味しい宮城県産米を頬張る学生

「一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会総会」 「全国体育系大学学長・学部長会総会」などが開催される



総会の様子



総会に出席する阿部学長

一般社団法人全国体育スポーツ系大学協議会は、体育系大学の経営者等で構成され、傘下の体育系大学全国体育系大学学長・学部長会議とともに、体育系大学における教育研究並びに管理運営等に関連する事項について協議し、相互の連絡・理解・親睦を図り、わが国体育の向上発展に寄与することを目的に活動しております。

びわ湖大津プリンスホテルを会場に、立命館大学びわこ・くさつキャンパスを幹事校として、協議会理事会・総会は5月25日に開催され、スポーツトレーナー制度、日本版NCAA制度等について、検討協議が行われました。

同じく、学長・学部長会議は、5月26日、節目となる第50回総会が開催され、加盟する28大学から会員をはじめ、事務関係者を含む57名もの参加がありました。（会長および事務局：順天堂大学）

この会の会長である荒井一順天堂大学・学長が欠席だったため、代理を務めた同大学・スポーツ健康科学部長の内藤先生が最初に「4年後に迫った2020東京オリンピック・パラリンピックについて、全国の体育系大学が尚一層、結束して自国開催オリンピックを成功に導こう」と挨拶されました。

次に会議のなかで、熊本地震の被災地である益城町へ、小学校・中学校のスポーツ施設復興のために使って欲しいと、この会から30万円の義捐金を贈ったことなどが報告されました。

昨年来の重要な話題の1つとして「2020東京オリンピック・パラリンピックに際し、もちろん体育系大学は各競技に選手を輩出しようと日々、努力を重ねているが、それだけではなく、体育系大学の学生達がボランティアとして大会を支援することに関しても国からの明確な指針が欲しい。JOCなり、オリンピック組織委員会にこのことを提案し、どのよう

にすれば全国にある体育系大学の学生たちがオリンピックを支える側として力を尽くすことができるのか？お話を聞きたい。来年のこの総会の場に、JOCなどから担当者を招

き、もっと体育系大学を活用して欲しいと呼びかけてはどうか？」という意見が多々出されました。事務局である順天堂大学は、そういった声をまとめて、しかるべき組織に遅延なく声をあげていくことをその場で確認し、参加者全員の賛同を得ました。

今回は、①日本福祉大学・スポーツ科学部、福井工業大学・スポーツ健康科学部、③大阪産業大学・スポーツ健康科学部、④同志社大学・スポーツ健康科学部の新たな4つの大学が新規加盟を希望し、全員一致で了解され、会員数が33大学となったことから、日本におけるスポーツ・健康分野の大学がいか

に増えているのか？を痛感し、お互いに協力しあいながらも良きライバル校同士として身の引き締まる場ともなったようです。来年は、5月24日～25日に全国体育スポーツ系大学協議会と共催で、桐蔭横浜大学を幹事校として第51回目となる総会開催が決まっており、オリンピック・パラリンピックという国家的行事の開催国として、体育系大学の果たす役割がますます重要になっています。

仙台89ERS スポンサー感謝の集いに参加

平成29年5月15日、勝山館にて開催された「仙台89ERS 2016-2017シーズン スポンサー感謝の集い」に朴澤理事長・学事顧問と出席させていただきました。会場には84社ある公式スポンサーの中から約50名の方々が集まりました。感謝の集いは球団代表中村彰久氏のあいさつで始まり、スポンサー企業への感謝の言葉がありました。B1リーグでスタートしたシーズンですが、残念ながら初年度でB2リーグに降格してしまったことへの無念の思いをお話されていました。また、間橋ヘッドコーチの挨拶では、「選手たちは持っている力を十分に発揮したことに関しては悔いがない、来季は1年でB1リーグに戻ってくる」と宣言していました。会が進むにつれて、私自身が選手と直接話をする機会もありました。佐藤文哉選手にとっては少し悔いが残るシーズンとなったようです。個人成績として昨年度よりも落としてしまったこと、怪我がないシーズンだったのに出場機会がない試合があったことなど、悔しさを打ち明けてくれました。石川海斗選手もシーズン後半戦に怪我をしてしまい、B1生き残りを賭けた数試合に出場することができず、悔しかった思いを打ち明けてくれました。

B1リーグはやはり厳しいリーグであることを改めて感じました。私自身シーズン中に数試合を観戦しましたが、勝ち試合を観ることはありませんでした。あるインタビューで志村雄彦選手は、仙台はB1で戦い続けられる組織ではなかった、という主旨の話をしています。チームの勝敗が直接的にB1リーグの残留や降格を決めますが、勝敗は選手・コーチ陣の能力だけではなく、球団側の様々な事情が大きく関係します。資金力、スポンサー企業や地元企業の協力、チーム編成、試合会場や商品の売り上げ、集客力など、多方面での運営力が球団に求められます。球団側が言っているように来シーズンにB1リーグ復帰を目指すのであれば、B1リーグで生き残る・勝ち進むための再整備を組織レベルで行わなければなりません。これからの組織改革とチーム編成に期待をしたいと思います。

仙台89ERSを離れて4シーズンが過ぎ、元チームメイトはたったの4人になってしまいましたが、一スポンサー企業の関係者として、そして一バスケットボールファンとして仙台89ERSを応援し続けようと思います。最後になりましたが、今なおチームとあたたかい交流を持たせていただける環境と、このような会に出席させて頂く機会をくださいました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

【報告：新助手 白坂 広子】



佐藤文哉選手(右)、石川海斗選手(左)と
朴澤理事長・学事顧問

大学院1年の齋藤友規さん

IBSAロービジョンフットサル世界選手権2017日本代表チーム監督に就任

大学院1年の齋藤友規さんが、イタリアにおいて5月27日～6月3日まで開催される「IBSAロービジョンフットサル世界選手権2017」の日本代表監督に就任することが決まったことの報告のため、5月17日に阿部芳吉学長を表敬訪問しました。

就任報告の中で齋藤さんは「強豪国ぞろいのヨーロッパのチームと戦う中で、日本チームがどのくらい通用するかが楽しみ。前回大会から2年間は特に攻撃の部分強化してきた。強化の成果を発揮し、初のメダル獲得を目指したい。」と意気込みを語りました。

阿部学長は「日ごろの練習で培った力を選手が発揮できるように頑張ってもらいたい。また、世界を舞台にして活躍した経験を、学部学生にも還元する機会も作ってもらえるとありがたい。」と齋藤さんを激励しました。

この大会への出場は2013年2月の前回大会に続き2度目の出場、国際大会への出場は2015年5月のIBSAワールドゲームズ以来となります。



阿部学長と握手する齋藤さん(右)

韓国交通大学(世界武道アカデミー) 一行が来訪

4月25日(火)に韓国交通大学の教授4名と世界武術アカデミー研究員4名の計8名が来訪され、本学の現代武道学科との武道セミナーが開催されました。

同大学校は韓国忠州市にある国立の大学校(8大学)であり、世界武術アカデミー研究所も設置されています。大学のある忠州市では、ユネスコの無形文化遺産に韓国伝統「テッキョン」が登録されている関係から毎年「世界武術祭り」が開催されています。この世界武術アカデミー研究所もユネスコと武道に関して提携されていることもあり、世界各地で武道セミナーを開催し、今回は本学の現代武道学科との交流でした。この交流のきっかけは、3年前から本学科の集中講義「韓国伝統武道」を担当されている金址赫先生が同大の世界武術アカデミー研究員として勤務されていることから実現しました。



発表終了後の記念写真

セミナーの内容は、本学朴澤理事長、阿部学長、韓国交通大学南重雄教授のご挨拶、出席者の紹介、その後、藪先生の司会のもとに両大学から下記の4名による発表が行われました。

発表1 南條充寿教授：「日本の競技向上の現状と課題ーリオ五輪を振り返ってー」

発表2 Choi Yoon-seok (韓国交通大学 教授)：「Assessing essential factors influencing a diffusion process for Traditional martial arts」

発表3 齋藤浩二教授：「武道とはー戦後の『スポーツと武道』の関係からー」

発表4 Kim Ji-hyuk (世界武術アカデミー研究員)：「Taekwondo and martial sports」

発表時間は20分と短い時間でしたが、発表後の質疑応答では活発に議論が繰り広げられました。特に、「武道とスポーツ」の話題が取り上げられ、剣道はスポーツであるのか、指導は勝つためにおこなわれているのか、「わざ」と技術の概念の違いとは、テコンドーは武道なのか等々の内容でした。韓国においても武道の競技化、スポーツ化されているところが問題になっており、日本も韓国も、武道はスポーツと認識をしながらも異なる干渉点が論点となりました。つまり、伝統文化としての武道の関わりや競技化、スポーツ化しすぎているところに問題が生じている現状です。南條先生の発表からは、選手強化に取り組みについてであり、特にメダル取得者の共通する人物像についての興味ぶかい話が印象に残りました。

セミナー後は、場所を移動して歓迎会が行われ、互いの交流も深まり、先生方の人柄のよさと南先生を中心に結束されたことに感銘を受け、またこのような機会が来る事が望まれる一席となりました。

【報告：現代武道学科学科長 教授 齋藤 浩二】

平成29年度学術会総会

新任教員発表会・新任教員を囲む会を開催

5月30日(火)16時より、A棟2階大会議室において、平成29年度学術会総会・新任教員発表会・新任教員を囲む会を学術会運営委員会主催で開催いたしました。

本会には朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長をはじめ、多くの学術会会員の皆さまにご出席いただきました。司会進行は学術会運営委員の高橋徹講師が務めました。

第一部の「学術会総会」では、小松正子教授が議長を務められました。小濱明学術会代表幹事、学術会事務局より平成28年度の事業・決算について報告、平成29年度事業計画(案)・予算(案)を提案し、ご出席いただいた皆様よりご承認をいただきました。

第二部の「新任教員発表会」では、6名の新任教員の先生方からお一人ずつ本学に着任されるまでの経歴や社会的活動、自らの研究活動についてなどを発表していただきました。大変興味深い内容にフロアからも質問が飛び交い、有意義な時間となりました。



佐々木教授の発表の様子

(次頁につづく)

終了後は、「新任教員を囲む会」を同会場にて行いました。新任の先生方を囲み、限られた時間の中ではございましたが、親睦を深めることができました。終始和やかな雰囲気で行われ、盛会となりました。

【新任教員の発表内容】

- ① 佐々木 鉄男 教授
「これまでの歩みと、新しいメディアへの対応」
- ② 千葉 喜久也 教授
「これまでの研究とその内容」
- ③ 池田 敦司 准教授
「経歴と活動」
- ④ 荒牧 亜衣 講師
「東洋の魔女、オリンピック、そしてミュージアム」
- ⑤ 田中 政孝 特任講師
「警察術科等の指導経験を踏まえた応用武道授業への導入展開と効果について」
- ⑥ 菅野 恵子 助教
「これまでの活動報告と今後の研究について」

【報告：仙台大学学術会 広報係】

「奇跡のレッスン」LIVEが全国放送されました(5月4日：NHK・BS1にて) ～本学第5体育館を会場で実施・収録～

NHKの人気スポーツ番組である「奇跡のレッスン」ライブが、本学第5体育館を会場に実施・収録され、番組は5月4日にNHK・BS1で全国放送されました。

内容は、フットサルの元日本代表監督のミゲル・ロドリゴ氏による地元の小学校チームに対するフットサルのワークショップと、終了後のコーチや保護者たちに向けてのトークショーでした。

この番組を本学で収録する運びになったのは、本学卒業生で㈱イースリーというサッカーを中心とした事業を展開している会社に勤務する平木千尋さんから連絡を受けたことがきっかけでした。私が外部の組織や団体との連携・共同を担当していると知り、1年生のスキー実習で私の班だったことから直接連絡をしてくれたそうです。ゼビオアリーナ等でも収録はできたわけですが、少しでも本学のPRになればという思いで一報してくれた母校への熱い想いに打たれ、入学式直前という忙しいタイミングではありましたが、営繕管理室にも協力していただき、部活とも調整した上で実施した次第です。

番組は連休後半の5月4日に放送されましたが、写真の通り遊びを交えた技術の習得や的を得た個人個人への声かけや適切な指導など、さすがは世界の一流指導者のレッスンは魅力に溢れていました。

一方、この番組へはコーチングコースからスタッフ2名、マネジメントコースから12名の補助スタッフに関わり、貴重な実学の場を体験することもできました。朝から夕方までの時間帯でしたが、参加した学生スタッフも大いに満足したようです。また、フットサル部にも前夜のリハーサルや本番でのアシスタントコーチなどで全面的に協力頂きました。

これから先も、こういった卒業生から母校の発展を願う持ち込み企画に対しては、誠意を持って対応していかなければと思います。

【報告：副学長・体育学科長 教授 仲野 隆士】



子どもたちに指導するロドリゴ氏



運営スタッフとして活躍した学生



本学での撮影のきっかけとなった平木さん(右)

祝「日本体育協会アスレティックトレーナー」検定試験合格

～運動栄養学科より初めての現役合格:村上泰司さん～

平成28年度3月に本学の運動栄養学科を卒業し、Monthly Report3月号でもご紹介した村上泰司さんが、このたび運動栄養学科より初めての現役学生として見事、「日本体育協会アスレティックトレーナー」検定試験合格にしました。本学の現役学生としては、平成26年度に体育学科を卒業し、同試験に合格、現在新助手としてアスレティックトレーニンググループに勤務する遠藤皓樹さんに続いて2人目です。

村上さんは現在、米国公認のアスレティックトレーナー資格(Athletic Trainer Certified=ATC)を取得するために、ハワイ州オアフ島にあるハワイ大学大学院進学を目指し、英語の勉強をはじめ、実家のある旭川で準備を重ねており、今年8月には渡米する予定です。

村上さんは初めての挑戦での合格という快挙に対し、感謝と喜びの声を寄せてくれました。

Q1. 合格にいたる秘訣と合格しての感想

最初から諦めず、常に合格するイメージを持つこと、合格すると声に出して自分に言い聞かせるのが1番の秘訣ではないかと思います。これまで積み重ねて来たものがAT合格として形になりとても嬉しいです。

Q2. どのように勉強したのですか？

筆記では約4年分過去問題を解いて、出来なかった問題を集中して取り組み、苦手な分野をノートにまとめました。また、アプリで一問一答形式の問題があったため、細かい空き時間を使って解き、寝る前にノートにまとめた物を振り返って記憶に定着させました。

実技では、ATの先生方の指導の元、テーピングのポイントや外傷・障害の評価のうえで注意する事、アスレティックリハビリテーションの内容について実際のテスト形式で何度も練習しました。先生がいらっしゃらない時は、友達と実際に実技をしながら、復習しました。

Q3. 合格した後、周囲の反応はどうでしたか？

お祝いの言葉と同時に、これからが本当の勝負だとたくさんの方々から声をかけていただきました。

Q4. 今回の合格はハワイ大学大学院進学にどのようにプラスになると考えますか？

米国公認のアスレティックトレーナー資格カリキュラムは基礎を徹底的に教える事に加え実習時間も長いので、約3年間で得た知識を更に磨く事が出来ると共に、課題である応用力や実践力を身につけられると思います。また、日体協のカリキュラムとの違いについても今回の留学を通して、肌で感じる良い機会になると楽しみです。

Q5. 合格したことを自分のキャリアにどのように活かしていきたいですか？

日体協を取得することでチャンスの幅を広げられる

と思います。様々な所でATに関わる研究は行われており、日本で機会があった際は日体協としてアメリカで得た知識を活かしながら、より深い研究を重ねていきたいです。

Q6. 村上さんが2回参加した、ハワイ大学におけるアスレティックトレーナー研修などは、合格に活かされましたか？

はい。ハワイ大学における研修に参加し、今まで見学した施設などで、自分が実際に勉強しているイメージを持つことができ、常に高いモチベーションを保てました。

Q7. この資格を目指す後輩たちにメッセージをお願いします。

実技試験の練習等に協力して下さった後輩のみなさん、本当にありがとうございます。どんなに上手くいかない事があっても、諦めずそれぞれの目標に向かって頑張ってください。

Q8. 渡米を目前にしての今のお気持ちを教えてください。

この合格を通して、常に目標を持ち続ける大切さを改めまして実感する事が出来ました。

4年生の前期は大きな壁にあたり、目標を見失いかけた時に出てくるのは言い訳と中途半端な人生しかありませんでした。しかし、トレーナーコースの先生方が貴重なお時間を割いてこの様な自分と向き合ってく下さったおかげで自分が本当にしたいものを見つけ、ここまで頑張る事が出来ました。合格にたどりついたのは、先生方に試験対策で様々なアドバイスを頂いたからにはほかなりません。日々の現場活動に加えて、米国公認のアスレティックトレーナーになり、AT普及に向けた研究をすると言う大きな目標を与えて下さった先生方、授業や試験対策をして下さった先生方、自分の留学に際し、ご理解下さった朴澤理事長・学事顧問、阿部学長、一緒に頑張った仲間や後輩に改めましてこの場をお借りし、心からの感謝を申し上げます。今後、ハワイ大学大学院へ進学し、精一杯勉学に励むことで、少しでも母校である仙台大学のみなさまへ恩返しできたらと考えております。



合格のお祝いと今後の活躍を期待して掲げられたのぼり



むらかみ たいじ

村上 泰司さん

出身高校

北海道・旭川南高校

経歴

平成29年3月

本学運動栄養学科卒業

祝 菊地新助手が管理栄養士国家試験に見事合格

3月19日に行われました第31回管理栄養士国家試験に見事合格した本学新助手の菊地遥さんに合格の感想などを伺いました。

Q1. 管理栄養士を目指したきっかけは？

中学生の頃にスポーツ栄養士の存在を知り、食事の面からスポーツ選手を支えることに、魅力を感じました。私自身、中学から高校まで陸上部として活動してきましたが、もともと身体が小さく、練習量に対する食事をとることが出来ていませんでした。貧血等に悩んだこともあり、スポーツ選手にとっての栄養の大切さを身にしみて実感していました。また、競技をする上で貧血や怪我だけでなく、摂食障害に苦しむ選手がいることを知りました。スポーツ選手を助けることができる栄養士になりたいという想いが強く、スポーツと栄養の両面を学ぶことができる仙台大学運動栄養学科を志望しました。大学入学後は運動栄養サポート研究会に所属し、スポーツ選手を実際にサポートする経験をする中で、スポーツ選手の栄養サポートには高度な専門知識や、実践能力が必要であることを改めて実感しました。そこで、大学卒業後は必ず管理栄養士の資格を取得しようと志しました。大学卒業後、運動栄養学科の新助手として採用していただき、管理栄養士を目指しながら受験資格に必要な実務の経験と、試験の勉強を行ってきました。

Q2. 勉強のポイントはどういうところにありますか？

管理栄養士国家試験を意識して本格的に勉強を始めたのは、大学4年生の夏頃からでした。大学卒業後、1年で必ず合格すると決意し、試験までどう勉強するか、いつまでにどのくらい実力をつけるか、具体的な目標と計画を立てました。定期的に過去問や模試を解くことで、問題の傾向を分析するとともに、目標に対して自分がどの位置にいるか確認を行いました。

社会人として仕事をしながら試験勉強を進めるにあたって、時間の管理も重要となります。限られた時間を有効にする工夫をしました。要点が簡易的にまとめられ、携帯性に優れた参考書を常に持ち歩き、時間を見つけては勉強をするようにしました。時間がとれるときは、詳細な解説や語句解説も充実した別の参考書を活用し、出題範囲の広い科目や内容が重複している分野、苦手分野は自分が納得するまで繰り返し学習するよう心がけました。

Q3. 合格の感想と今後の豊富をお願いします。

中学生の頃から夢を追い続け、管理栄養士としてスタートラインに立つことができたのは、先生方のご指導や、周りの方々の応援や支えがあったからこそだと思います。自分自身を成長させてくれた皆さんに、感謝の気持ちでいっぱいです。

試験に合格したものの、まだまだ未熟な部分がありますし、管理栄養士として求められる専門的な知識を深めていく必要があります。常に向上心を持ち、学び

続ける姿勢を大切にしていきたいです。また、今後は公認スポーツ栄養士の資格取得を視野に入れ、競技者の栄養・食事に関する専門的な知識や、栄養マネジメントスキル等を身につけたいと考えています。

Q4. 管理栄養士を目指す後輩たちにメッセージをお願いします。

まずは、自分の目標を明確にし、目標を達成するために必要なプロセスを考え、強い意志を持って根気強く取り組むことが大切だと思います。なぜ管理栄養士になりたいのか、自問自答しながら目的を確認すると、今の自分がすべき行動を積み重ねていくことができるのではないかと考えます。私自身も、夢の実現に向けて今後取り組むべきことがたくさんあります。夢を叶えるために、一緒に頑張りましょう。

山谷幸司学運動栄養科長より

菊地さん、今後益々の活躍を期待します。管理栄養士を目指す皆さんは合格した先輩から、多くを学んでください。



きくち はるか
菊地 遥さん
出身高校
宮城・聖和学園高校
経歴
平成28年3月
本学運動栄養学科卒業

なお、昨年まで本学で運動栄養学科新助手として勤務していた只野瑞枝さん（平成26年3月運動栄養学科卒）も見事合格しました。

只野さんからのコメント

この度、管理栄養士国家試験に二回目の挑戦で合格することができました。

合格までの道のりは簡単なものではありませんでしたが、ここがゴールではなく新たなスタートとして捉え、管理栄養士として多くの方々の役に立てるよう日々精進して参ります。応援ありがとうございました。

東北大学バレーボール男女リーグ戦 第50回記念大会を本学を会場に開催

4月29日(土)、30日(日)に第50回東北バレーボール男女リーグ戦記念大会および式典が本学第五体育館を会場に行われました。

バレーボールのリーグ戦は年2回、春季および秋季リーグ戦として行われ、東日本インカレや全日本インカレに関係する大変重要な大会です。かつては東北の北と南で分けて行っていたものを統一し(1部のみ)、そこから50回という回数を重ねました。

今回の第50回記念大会には東北リーグに所属している1部～4部の男女すべてのチーム(59チーム)が一堂に会し熱戦を繰り広げました。当日は男女バスケットボール部、男女ハンドボール部、営繕管理室等、多くの関係者のご協力のおかげもあり、第二・五体育館および船岡体育館で計7面のバレーボールコートで開催することができ、大変盛り上がる大会となりました。

さらに期間中、本学のAT部とも連携を図り第五体育館に選手のテーピングやアイシングなどを気軽に行えるATブースも設置し、多くの利用者が訪れ、仙台大学の特徴を十分活かすことのできた素晴らしい大会となりました。

【報告：男子バレーボール部コーチ 新助手 中村 祐太郎】



59チームが一堂に会し開催された記念式典



**2020東京五輪に向けて
～活躍が期待される新入生～**

ウェイトリフティング部 福塚 真羽さん

東北高校選手権2連覇、全日本女子選抜選手権75^{kg}級で準優勝の実力をもつ福塚真羽さん。大学入学後初の大会となった第29回全日本女子学生ウェイトリフティング選手権大会では1年生ながら強豪校の上級生らをおさえ、堂々の3位入賞を果たしました。

5月28日には「全日本女子選手権大会」にも出場しました。この大会は世界選手権を懸けた国内において最高峰の大会で、特に福塚さんの階級は選手層も厚く、今大会においては社会人も含めた年代別チャンピオンや高校生チャンピオンが上位を独占し9位という結果に終わりました。高校時代から男子と同じ練習メニューをこなし自分に厳しく練習を重ねてきた福塚さん。指導するウェイトリフティング部の壺岐監督も「順調なペースで来ているので、焦ることなく練習に励んでほしい。これから確実に伸びる選手。」と太鼓判を押します。東京五輪にむけて確実に自己記録を更新しながら益々の飛躍が期待されます。



ふくつか まう
福塚 真羽さん(体育学科1年・秋田県金足農業高校出身)

初出場の「全日本女子選手権大会」では75kg級9位という結果で悔しい思いをしました。5か月後に控える10月の全日本学生新人大会ではトータル180kg(スナッチ80kg+ジャーク100kg)を目標に挙げ、まずは最低でも優勝を狙います。

テコンドー部 猪飼 令央さん

オリンピック正式種目でもあるテコンドー競技。本年度からテコンドー部が新設されました。現代武道学科1年の猪飼令央さんは全日本ジュニアテコンドー選手権大会2年連続優勝の実力の持ち主で2020東京五輪を見据え本学へ今年4月に入学。小学1年で空手を始め、足技が得意であることから師範の勧めで中学1年からはテコンドー競技を始めました。テコンドー競技は多彩な足技が魅力の一つで一試合2分3ラウンドのポイント制で勝敗が決まります。高校ではテコンドー専攻科のある新潟県開志学園高校を選び、より専門的な知識も身につけてきました。

タイ王国で開催された入学後初の国際大会では小規模大会ながらも58kg級で堂々の1位と2位を獲得し、テコンドー部部長の末永教授と副部長の金講師とともに阿部学長のもとへ大会の報告を行いました。今後益々の活躍が期待されます。



いかい れお
猪飼 令央さん (現代武道学科1年・新潟県開志学園高校出身)

「第7回ラチャブリーオープン2017」と「ホアヒンオープン2017」の大会はいずれもタイで元五輪代表選手が主催する大会で、大会の間には代表選手が集う強い道場で、稽古をさせていただきました。タイの選手はスタミナとパワーが格段に上なので今後は自分自身も身体づくりを強化していかなければならないと感じています。

今後は2020年の五輪出場を目指し、9月3日から岐阜県羽島市で開催される「全日本学生選手権大会」で優勝を狙います。海外赴任が長い父親の影響もあり、大学では中国語なども習得し、文武両道で将来は世界で活躍できる人材になりたいです。

学生の活躍

漕艇部 全日本軽量級選手権大会男子エイトで準優勝など4種目で入賞

5月26日～28日に埼玉県戸田ボートコースで開催された第39回全日本軽量級選手権において下記4種目の入賞を勝ち取ることができました。競技継続しているOBの結果も併せて記します。

大会期間中にはOBも駆けつけ、心強いサポートも受けています。

仙台大学の結果

男子エイト	準優勝	(優勝：明治大、3位：一橋大)
女子クォドルプル	第3位	(優勝：明治大、2位：法政大)
女子ダブルスカル	第4位	(優勝：明治安田生命、2位：筑波大、3位：早稲田大)
男子舵手なしフォア	第5位	(優勝：東レ、2位：東北大、3位：NTT東日本、4位：日大)



準優勝した男子エイト (手前から2艇目)

OBの結果

- ・渡邊 勝裕 (平成19年体育学科卒、NTT東日本) 舵手なしフォア 第3位
- ・別府 晃至 (平成21年体育学科卒、今治造船) ダブルスカル 第3位
- ・大元 英照 (平成19年体育学科卒、アイリスオーヤマ) ナショナルチーム評価トライアル
ワールドカップ第2戦から参加決定
- ・西村 光生 (平成24年体育学科卒、アイリスオーヤマ) ナショナルチーム評価トライアル
ワールドカップ第3戦から参加決定

【報告：漕艇部監督 教授 阿部 肇】

学生の活躍

硬式テニス部 邊見文香さんが東北大会3位入賞 ～シングルスの9年ぶりのインカレ出場決定～

このほど開催された東北学生春季テニストーナメント大会において、硬式テニス部の邊見文香さん（体育学科1年 - 福島県・日本大学東北高校出身）が女子シングルスで第3位に入賞し、8月7日～13日に岐阜県で開催される全日本学生テニス選手権大会（インカレ）の出場権を、仙台大学として実に9年ぶりに獲得しました。

邊見さんは、お母さんやお姉さんの影響を受け小学校3年生から硬式テニスを始め、めきめきと腕を挙げてきました。高校時代には3年連続インターハイに出場し、3年生の時には団体でベスト16に入るなど、東北として稀にみる快挙を挙げました。

柔道整復師をめざし専門学校への進学を考えていた邊見さんですが、大会会場で硬式テニス部監督の佐藤周平先生に声を掛けられ大学への進学を考え始めたといいます。実際にクラブ体験会に参加してみると「練習環境はもちろん、先輩方の雰囲気もものすごくよかったです。」と、仙台大学への入学を即決したのだそうです。

大学入学後も集中してトレーニングや朝・夕方練習を行うことで、1年生にして見事、インカレの出場権を獲得した邊見さん。「まずは1勝することが目標。4年後にはベスト16に入れるように頑張りたいです。」と力強く語ってくれました。

硬式テニス部に現れた“新星”の活躍に佐藤周平監督も「テニスは個人スポーツですが、練習はチームで行います。どんなに強い選手が入学しても、その選手に仲間と努力・挑戦する気持ちがなければ、良い影響はありません。邊見はそれが自然と出来る選手です。新しい刺激を受け、大学時代で確実に成長します」と大きな期待を寄せています。



3位に入賞しインカレ出場を喜ぶ邊見さん

ウェイトリフティング部 第三回荘内日報社杯に出場 大津選手が自己新記録更新し94kg級で優勝

4月22日（土）に山形県鶴岡市羽黒体育館で開催された「第3回ウエイトリフティングフェスティバル in SHONAI」に本学ウエイトリフティング部（男子部員2名、職員2名）が出場しました。阿部芳吉学長も会場に駆け、大きな声援で選手を鼓舞されました。

男子94kg級に出場した大津恭輔選手（体育4年一宮城・石巻高校出身）がC&J種目の3本目に145kgを成功させて優勝を決めました。大津選手は自己新記録を5kg更新し、トータル重量も昨年の大会より20kg増加させるなどめざましい成長が見られました。

男子69kg級は、村松コーチがスナッチ100kg、C&J120kgの記録を出し、小川純選手（運動栄養学科4年一山形県・酒田高校出身）の記録（スナッチ95kg、C&J120kg）にトータルで5kg差をつけて優勝しました。

男子77kg級に出場した壹岐は、体重を3kg減量しながらもスナッチ100kg、C&J125kgを成功させて優勝するに至りました。

男子85kg級に出場した大谷祐希選手（スポーツ情報情報メディア学科3年一宮城・柴田高校出身）は、怪我を抱え、十分な練習ができていない状態でしたが、自己新記録にも挑戦し準優勝を果たしました。

【報告：ウエイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】



男子94kg級で優勝した大津選手

学生の活躍

ウェイトリフティング部 福塚選手が全日本学生個人選手権大会で3位入賞

4月28日～30日に羽曳野コロセアム（大阪府）で開催された「全日本学生個人選手権大会、全日本女子学生選手権大会」で期待の新生、福塚真羽選手（体育学科1年 - 秋田・金足農業高校出身）が女子75kg級で3位入賞しました。

今大会は、ユニバーシアードの選考会となったため、出場選手のほとんどが日本代表や大学トップレベルの選手でした。福塚選手は、高校時代（全国大会2位）の経験を活かし、スナッチ68kgで4位、クリーン&ジャーク87kgで3位、トータル155kgで3位に入賞し大学のデビュー戦で表彰台に上ることができました。

女子53kg級に出場した渡部詩乃選手（体育学科3年 - 山形・鶴岡北高校出身）は、クリーン&ジャーク種目で5位入賞しました。女子58kg級に出場した大野美幸（健康福祉学科2年 - 宮城・柴田農林高校出身）は、クリーン&ジャーク種目で73kgを挙上し入賞までは届かなかったものの、4大会連続で自己記録を更新しました。

全日本個人選手権に初出場した保科魁斗選手（体育学科2年 - 宮城・村田高校出身）は、男子105kg級のクリーン&ジャーク種目で150kgを成功させ、8位に入賞しました。保科選手は昨年11月に出場した全日本大学対抗選手権大会（二部）に比べ、トータルの記録において15kgと大幅に更新しており、今後の成長も十分に期待できます。

なお、会場には、阿部学長、高成田部長も駆けつけ、選手に気合いが入る応援を送っていただきました。

【報告：ウェイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】



3位に入賞し表彰台に上る福塚選手

ウェイトリフティング部 全日本女子ウェイトリフティング大会に出場 ～福塚選手が堂々の8位入賞～

5月26日～28日に栃木県小山市で第31回全日本女子ウェイトリフティング選手権大会が開催され、本学からは福塚真羽選手（体育学科1年 - 秋田・金足農業高校出身）が女子75kg級に出場しました。

この大会には各階級の基準記録を突破した10名のみが出場することができ、世界選手権の選考も兼ねています。福塚選手は出場条件が厳しい本大会に1年生ながら出場し、クリーン&ジャーク種目の2回目に89kgの挙上に成功し、8位入賞を果たしました。スナッチは、69kgで9位、トータル158kg9位という結果でしたが、3位に入賞した全日本女子学生選手権大会からトータルで3kgも自己記録を更新する成長を見せてくれました。

今回の大会出場を通じて、上位に入賞した日本代表選手とは大きな差があることを改めて痛感したものの、日本新記録が達成される緊張感のある大会に出場できたことは今後の活動にとって貴重な経験であり、今回の悔しさをバネにさらに成長してほしいと考えています。



8位に入賞した福塚選手

【報告：ウェイトリフティング部 監督 新助手 壹岐 優】

学生の活躍

硬式野球部 仙台六大学野球春季リーグ戦惜しくも全国の切符を逃す

4月8日に開幕した仙台六大学野球春季リーグ戦で、本学硬式野球部は最終節で東北福祉大学に敗れ、昨年秋からの連覇達成は叶いませんでした。

最終節まで全勝と波に乗っていた本学は、最終節の東北福祉大戦1回戦で7対3で勝利。しかしその後の試合で2連敗を喫してしまいました。

各試合には多くの同窓生などの本学関係者が会場まで駆けつけてくださり、選手が頑張る姿に声援を送っていただきました。

なお、大会終了後に行われた閉会式ではベストナインが発表され、4名の選手が選出されました。また、最多盗塁賞（8個）に郡安輝内野手（体育学科3年－東京・帝京高校出身）が選ばれました。

硬式野球部は今後、6月24日（土）～25日（日）に開催される春季新人戦、6月29日（木）～7月2日（日）に開催される第12回東北地区大学野球選手権大会に出場することになっています。選手たちの成長と今後の活躍を応援しています。



ベストナインに選ばれた岩佐投手

ベストナイン（仙台大学関係分）

ポジション	氏名	学年 - 出身高校
投手	岩佐 政也	体育学科4年 - 宮城・柴田高校
捕手	辻本 勇樹	体育学科3年－北海道・北海高校
三塁手	望月 隆晟	体育学科3年－千葉・東海大浦安高校
外野手	白川 拓海	体育学科4年－茨城・霞ヶ浦高校